

## 自由応募分科会 1

### 全体趣旨

益尾知佐子（九州大学）

#### 「海洋境界をめぐる東アジアの国際政治」

" 21世紀に入り、東アジアでは海洋境界をめぐる地域秩序が動揺している。東シナ海・南シナ海問題の中心には、「海洋強国」への跳躍をめざす中国の姿がある。中国は、南シナ海で史上例のない大規模な埋め立て工事を行って軍事基地の構築を進めながら、尖閣諸島周辺でも軍・官・民を動員した実効支配の強化を試み、その「海洋国土」の最大化を試みている。米国に比肩する世界大国への跳躍を目指す中、習近平政権は「海洋強国」建設に向けた動きを加速してきた。中国の海洋進出は、中国台頭時代の新たな地域秩序の帰趨を左右する重大な要因になっている。

ただし、関係国の対中政策は極めて複雑な様相を呈し、決して一枚岩ではない。日本は2012年以降、中国の「力による現状変更」に対し、最も明確に異を唱えてきた。しかし南シナ海に関する国際的な対中裁判で圧勝したフィリピンにおいてさえも、ドゥテルテ新政権は中国のもたらす経済利益を考慮し対応策を絞りきれていない。東アジアの地域統合の核となってきた ASEAN では、中国の南シナ海での行動をめぐる内部の亀裂が深まっている。米国のオバマ政権は事実上、中国の海洋進出を容認する穏健策をとってきたが、新政権がこれを踏襲するかどうかは不透明である。つまり、中国の海洋進出への懸念を一定程度共有している国々の間でも、自国にとっての海洋境界の重要性、中国との国力差、中国から得られる利益や中国の将来的な意図への見込みなどが異なるため、中国への認識のばらつきと対応策の幅は非常に大きい。

以上のような東アジアの状況を念頭に、本分科会は地域研究や ASEAN 研究の視点を踏まえ、まず中国および関係各国・組織の海洋政策を比較する。その上で、それらを全体として合わせたときに、東アジアの今後の地域秩序にはどのような可能性があるのか、新たな秩序形成にはどの程度の時間とコストが必要なのか、重要な争点は何か、などの問題を検討していきたい。"